

アフリカ文学と Oral Literature (2)

— Mazisi Kunene ふたたび

赤 岩 隆

要旨：前回に引き続き、南アフリカの詩人 Mazisi Kunene を取り上げる。とりわけ、彼の二冊の詩集、*Zulu Poems* と *The Ancestors & the Sacred Mountain* とに注目しつつ、まずそれらに付された十分な分量の序文について詳しい検討を加え、続いて、それらから読み取れる彼の主張や美学というものを、oral literature と結び付けて考える。その際、特に重要となるのは、彼のエグザイルという特殊な立場である。というのも、oral literature は、本来的に、その成立する具体的な場というものを絶対的に必要とするのだが、亡命者でいるかぎり、それが叶わないからである。そうした立場の問題と、対アパルトヘイト闘争、プロバガンダ、あるいは、そこから派生する美学上の問題等々を、oral literature 及び彼の詩作品との関係の上で論じてゆく。

1

oral literature というものが音声により成り立っている以上、その特性として、いわゆる一過性を免れ得ないのは致し方ないことである。畢竟、研究者としては、それについて論じる際に、ことさらパフォーマンスの側面に力点を置きたくなるのも無理のない話だと言えよう。たとえば、Ruth Finnegan は、すでにこの分野では古典となった著書の冒頭部で次のように述べている。

oral literature の持つ、第一の、もっとも基本的な特徴については—— 諸々の撰集や分析等においては往々にして見落とされはするが—— いまさら取り立てて議論する必要はないだろう。すなわち、実際のパフォーマンスの重要性というのがそれであるが、定義上、oral literature は、時を選び言葉でそれを具体化する演じ手にこそ依存する—— それ以外にそれが文学的産物として結実することはあり得ない。文字で書かれた文学の場合、その作品は、独立した形ある存在物として難なく認められる…。が、oral literature の場合そうはいかない。そこにおいては、伝達と存在それ自体とは、はるかに親密な関係を持つと言わなければならないからである。従って、実際の伝達手段の問題は、一次的な重要性を持つことになる—— 口頭による実際化、唄い手あるいは話者による直接の作品化なしには、文字に依らない文学作品の場合、いやしくも連続した、独立の存在を有するとは容易には言い難い。この点、比較の対象としては、文字による文学ではなく、音楽やダンスといったものにこそ求められるべきである。これらもまた、最終的にはパフォーマンスにおいて、そして、パフォーマンスを通してのみ実際化する芸術の形式だと言えるからである。考えようによっては、パフォーマンスの繰り返しを通してはじめて連続した存在を獲得し得る芸術形式だとも言えるだろう。

(Finnegan, 1977, p. 2)

そのようにして oral literature というものを、文字に依る文学の「他者」と捉え論じることには、たしかに見逃せない学問的意義も魅力も認められるところであるが、同時に、それがすべてではないことも忘れてはならない。たとえば、同じ「口承文学」に言及する際、oral tradition といった表現がごく普通に使われるが、この 'tradition' という言葉には、パフォーマンス＝即時性を oral literature の最重要の要件とする場合とは異なる特性の存在が強く示唆されている。すなわち、反復／再現の可能性や相当程度の不変性といったものがそれであるが、oral literature というものをそのようなものとして積極的に捉えたひとりに、前回同様、今回も採り上げることになる Mazisi Kunene がいる。以下においては、彼の二冊の詩集、*Zulu Poems* と *The Ancestors & the Sacred Mountain* とに注目しつつ論を進めてゆきたいと思うが、その前に若干の復習が必要である。というのも、この二冊の詩集の出版年のあいだには、十二年もの年月の展きがあるからである。アパルトヘイト下の南アフリカというきわめて特殊な事情を考えた場合、これはおざなりにできない年月の展きだと言えるだろうから、まずはその辺りの政治的・社会的変遷の概略について手短かに整理しておこう。

2

Zulu Poems の出版された一九七〇年というのは、すでに、Black Consciousness の時代に入っている。一九六八年、まだナタール大学の学生だった Steve Biko によってはじめられたこの運動は、黒人の内面的な意識を変革するという、一見革命本来からは迂遠にみえる目標を掲げ、徐々にその勢力を拡げていった。七〇年代を通じ、体制としてのアパルトヘイトは概ね安泰を保ったが、七六年にはソウェトで激しい暴動が起きる。これもほかならぬ Black Consciousness の運動の成果のひとつだったわけだが、体制側の動揺をあらわにする形で、翌七七年には、Biko が官憲の手により殺害される。けれども、六〇年代に、民族の槍やポコといった過激派が爆弾闘争に失敗し、結果として、Mandela ら多数の指導者が逮捕された時とは決定的に事情が違っていた。Black Consciousness の草の根の運動は、すでに黒人意識の奥深くまで浸透し、指導者である Biko の突然の死によっても、その勢力の弱まることはなかったからである。そうした新しい情勢に対応すべく、七八年には、Vorster に替わって Willem Botha が首相の座に就く。八四年には新憲法を制定し、インド人とカラードを限定的に中央の政治に参加させることで、反体制派内部の分裂を図ろうとした。けれども、そうした体制側の思惑には二重の意味で無理があった。ひとつには、七〇年代の終わりごろから顕在化しはじめた経済上の不況が、コストの面で本来的にきわめて効率の悪いアパルトヘイトという法体系の維持に圧迫を加えた。一方的に黒人を犠牲にすることで有権者の生活水準をいびつに上昇させることには成功したが、それが落ちないようにするという次の目標を達成することも、それほど楽な作業ではなくなってゆく。いっぽう、反体制の側では大同団結が進み、八三年には統一民主戦線が結成されるなど、取り締まる側からみれば、じつに捉えどころのない不気味な拡がりを見せはじめる。内では抵抗運動の激しさが増し、外からは経済的な圧迫を受けて、海外資本の撤退が相次ぐなどして、インフレ率は八〇年代を通じ鰻登りに上昇してゆくことにもなる。

そのように七〇年代から八〇年代にかけての十年間というのは、アパルトヘイト崩壊の歴史という観点からみれば、じつに意義深い十年間であったのだが、その間 Kunene は、ずっと国外にいて、そうした南アフリカ内部の動向を外から見守っていた。抵抗運動に外からコミット

せざるを得ないエグザイルの心境や孤独がどのようなものであったか、容易に臆断することはできないが、彼の立場がそのようなものであったという事実だけは念頭から放してはならないだろう。いうまでもなく、彼の作品は、すべてそうしたパースペクティブのもとに書かれているからである。Kunene が、いったんズールー語で書いた詩を自身で英語に翻訳し出版していることについては、前回にも言及しておいたが、この特徴的な創作方法にしても、エグザイルという立場と無縁でないだろうし、oral literature との関係のうえでも、また然りと言わなければならないはずである。以上を議論のもっとも大きな枠組みとして、年代順に *Zulu Poems* のほうからみてゆくことにしよう。

3

本稿において採り上げられる *Zulu Poems* と *The Ancestors & the Sacred Mountain* には、著者自身による序文が付いている。それぞれ十分な分量のある文章なので、まずはそれらからみてゆくことにする。

Zulu Poems の序文において、Kunene は、一貫して 'communal' ということを主張している。アフリカの文学は、すべからくそのようになっており、彼の属するズールー文学も例外ではないと彼は言うのだが、では、Kunene の主張する 'communal' な文学とは、具体的にどのようなものなのだろうか。序文に続く自身の作品が詩である以上、この形容についての内容説明も、当然のことながら、まずは詩を中心に展開されることになる。

アフリカの文学が表現するのは、なによりコミュニティの歴史的な状態であるから、詩人が抽象的な思索をしたり、個人的妄想に耽るなどということはない。詩人は、出来事の記録者であり、自身の時代を他の時代と関係させながら評価する。詩人は、歴史上意義深い出来事について詳細な知識を有し、そうした出来事のなかから、もっとも象徴的表現力に富む出来事を選び抜き、そのうえで倫理を展開し、あるいは、それを肯定するという責務を負っている。(Kunene, 1970, p. 13)

ここでまず重要なのは、「詩人が抽象的な思索をしたり、個人的妄想に耽るなどということはない」という一文である。というのも、そうした流儀こそは西欧流のものであり、それとの交わりや関係を根本的に断とうとする態度が、そこからは明瞭に読み取れるからである。この点については、*The Ancestors & the Sacred Mountain* の序文において、より先鋭に批判されていることであるから、詳しい議論はそちらのほうに譲ることにして、ここでは、'communal' という形容が、西欧流のやり方のアンチ・テーゼとしての役割を担っていることだけを確認するにとどめたいと思うが、といて、もちろん、この形容がまったくネガティブな役割のみを背負わされているというわけではない。それが証拠に、

アフリカにおける communal な組織というのは、しばしば主張されるのとは違って、個々の不足を補い合うための単なる個人の集合ではない。(ごく表面的には似ているとしても) ヨーロッパの田舎にみられるような共同体と比べられるようなものでもない。それは、独自の倫理を発展させ、独自の哲学体系を持ち、現実や経験を投影し解釈するのに、独自の形式をもつ

てするという意味での communal な組織なのである。(Ibid., p. 11)

そのように Kunene は、'communal' であることがアフリカの独自性の源であるとまで言うのだが、とするならば、文学についても同様である。ようするに、アフリカの文学は、コミュニティとの絶対的な結び付きを持っている。この「絶対的」という言葉の意味の深さは、上記引用のヨーロッパにおける共同体との差異をめぐる発言のそれとも同断だと言えるだろうが、それが証拠に、Kunene はこう続けている。「こうした文学と歴史の接近性の結果、前者は後者の栄枯盛衰にぴたりと寄り添うことになる」と (Ibid., pp. 13-14)。時代が栄えれば文学も栄え、時代が衰えれば文学も衰退する。とあって、口先だけの無意味なレトリックとはわけが違ふ。文字どおり両者は直結しているのだと、Kunene は主張する。それゆえにこそ、その反映としてズールー文学の持つ特徴のひとつを、Kunene は執拗に指し示すことになるのだが、それは同時に、最初の引用でみたようなアンチ・テーゼの実際的な裏付けともなっている。

ズールー詩の主要な特徴のひとつは、そのイマジェリーの具体性である。詩を生み出すのは日常の経験にほかならないから、当然、詩の言語や象徴もまた具体的なものとなるのである。このことはつねに念頭に置いておくべきである。翻訳された形では教訓的にみえたり、あるいは、精神的な含みを持つようにみえる発言でも、じつを明かせば、そうした外見とは大抵無縁だったりするのである。(Ibid., p. 16)

Kunene によれば、ズールー文学はつねに具体性を欲し、無闇に抽象的であることを嫌う。従って、彼はこうも言っている。

とあって、ズールー詩に、幻想的なものがまったく欠けるというわけではない。けれども、大事なのは、そうした幻想にしても、確固として現実の経験に根ざしているという事実である。抽象的な概念は、具体的なイメージを使用することによって投影される。愛とあって、単なる概念ではない。ふたりの個人が、自身の属する社会的グループの求めに直接応じて成した、社会的行為及び思考の結果なのである。(Ibid., p. 16)

さらには、

「先祖の霊の住む彼岸の世界」という概念も、同様にして、具体的なものである。そこは、なにより死んだ者たちが、まさしく生前どおりの性格を保持しつつ暮らす安住の地である。…死後の世界について手の込んだ幻想をめぐる文化の側からみれば、そうした考え方は単純にみえるかも知れないが、ズールー人に言わせれば、幻想化する文化のほうこそ、子どもっぽく、現実性に欠けるのである。(Ibid., p. 17)

従って、そうした特異な文化や伝統に育まれた才能が、たとえばイギリス詩に憧れたところで、結果は不毛である。「とりわけ、キーツやシェリー、ワーズワースといった十九世紀のイギリス詩人の模倣」に終わるのが落ちである。ところが、そうした文学こそアフリカの文学だと一般には誤解されている。それに対し、Kunene は、アフリカ人はアフリカの伝統に「絶対

的」に帰るべきだと強く主張する。

4

The Ancestors & the Sacred Mountain の序文における Kunene はさらに過激である。西欧の文明、文化や伝統を厳しく批判し、アフリカのそれを執拗に対置してみせる。たとえば、植民地主義を支える進歩の概念に対しては、

倫理的に高度に進んだ社会が必ずしも技術的に進んでいるとは限らない。同様に、技術的に進んだ社会が自動的に高度な倫理水準を保持するというわけでもない。実際、技術的な進歩は、往々にして社会を野蛮化する傾向にある。(Kunene, 1982, p. xi)

植民地支配を理論面で支える、技術的進歩あるいは物質的な繁栄＝精神的倫理的進歩という単純化を、稚拙なものとして Kunene は噛み捨てる。「社会を野蛮化する」ものとして、むしろそれを危険視し、両者をきっぱりと弁別するアフリカのやり方のほうをよりバランスの取れたものとして称揚する。

通常社会においては、社会的物質的な進歩というものを、より低いレベルから高いレベルへと進む成長になぞらえて捉えるが、アフリカ社会では、両者は別けて考えられる。倫理的側面と技術面のそれとは、しばしば相反する動きをみせるものだということを知っているからである。(Ibid., p. xi)

物質的な豊かさや技術的な進歩を精神的なそれと幻想したところに、西欧の誤りの基があると、Kunene は言う。それどころか、前者は後者を崩壊させる。なぜなら、物質主義や技術崇拜によって生み出される個人主義は、人間的な精神の豊かさを保証するはずのコミュニティという基盤を根底から破壊するからである。*Zulu Poems* の序文で執拗に使用される ‘communal’ という形容の意味もそこにこそある。

かくて、人類を二分するのは、文明化された者とされていない者という区別ではない…。そうではなくて、利己的／反社会的性質によりどれだけ支配されているか、その度合いに従って、文明の程度は決まるのである。(Ibid., p. xiii)

とするなら、物質主義に毒された西欧文明に、アフリカ社会を支配する権利などない。物質的な豊かさのみを追い求めた結果は、「断えざる人間生活の野蛮化、獣化」にほかならないからである。

そうしたより劣等な西欧流のやり方に対し、「人間と獣とを分けるそもそもの源」にまで戻って、Kunene は、本来的な理想を掘り起こそうとする。人間と獣とを分けるものは道具ではない。なぜなら、「道具を人間の進歩を測る第一の指標とすることによって、社会的目的を二次的地位に貶める危険を冒す」ことになるからである。そうした「社会的目的」を総括する原理のことを Kunene は、‘Fundamental Law of Humanity and Cooperation’ と呼ぶが、その類似

の表現として、‘Fundamental Ethical Laws’ とか ‘Fundamental Moral Law’ と言っているのを見ても解かるとおり、これは社会の倫理や道徳に深く関係している。そして、その支柱をなすとされるものが、詩集のタイトルにもある ‘Ancestors’ にほかならない。この ‘Ancestors’ と呼ばれるものには、‘Beautiful Ones’ や ‘Blind Ones’、‘Great Ones’ といった複数の別の呼び名があり、従って、安易に「先祖」とは訳し難いものだが、Kunene の説明によれば、「もっとも高い理想である、社会的行為や社会的結束力の向上」に貢献したがゆえに、「一段と高い人間」と見做されるに到った有名無名の者たちを総称して使われる。

というのも、その英雄的な手本を通じ、後世の者たちが見習うべき道徳の標準を打ち立てたのが、ほかならぬ先祖だからである。(Ibid., pp. xi-xii)

「英雄的」とはいつでも、通常想定される勇ましさとは関係ない。というのも、ここに言うヒロイズムとは、「コミュニティに対してなされた自己犠牲」(Kunene, 1970, p. 11) を指すものだからである。なにより重要なのは、コミュニティであり過去なのである。過去とは、乗り越えられるべきものではなく、もっとも貴重な智慧を求めべき場所、たえずそこへと回帰しなければならない場所である。そして、その先導役を務めるのが詩人なのである。

このようにして、過去においてなされた社会的進歩というのは、未来においてなされる進歩にも増して重要なのである。過去においてなされた進歩は、文明の基礎を形造るという意味でもっとも重要な一步だったからである。それだけではない。社会の倫理的な方向の基礎を定めたのも過去である。それゆえ、我々の未来的展望というのは、哲学的にみれば、過去に深く錨を下ろしている。過去は現在にとってなくてはならないものである。かくて、先祖を指して、原始的だとか非文明的だとか遅れているなどに見做すことはできないのである。(Kunene, 1982, p. xii)

これが社会や伝統、文化の基礎と見做される。そして、文学は、その基礎に連なる形でのみ成立する。

こうした考え方に従えば、最良の文学というのは、過去の偉大なヴィジョンや行為を集めた総体である。社会の膨大な経験を想像力豊かにドラマ化したものである。未来については、いまだ現実化していないがゆえに拘泥しない。社会化する技法を通じ、文学は知識や哲学、社会のあらゆる芸術的経験を保存し広めるのである。(Ibid., p. xvi)

あるいは、

哲学と芸術の世界が融合し、ある原理を生み出す。その原理のめざすところは、人間生活のあらゆる表現の社会的目的を確認する点にある。ようするに、社会的結束の理想とは、芸術と出来事との融合として投影される。芸術は、別個の範疇として認められることなく、祭りやその他公的な儀式によって祝われる知的伝統を広める機関として機能する。芸術のヴィジョンは、現在の政治的条件を越え、基本的法則のそれとも比肩し得る内在性を獲得することこ

そ望ましいのである。(Ibid., p. xvi)

5

このようにみてくれば、Kunene と Ruth Finnegan とのあいだには、じつに当事者と部外者の相違にも相当する隔たりのあることが解かるだろう。といて、Kunene の態度がことさら排他的であるというわけではない。それよりは、彼が進んで身を置く立場が、そこまで過酷な要求をするものだったということ、ここで再度確認しておくべきである。それについては、本稿の最初のところでまとめておいた時代の概略を想起すれば、誰しも容易に首肯けるだろうが、Finnegan の学問的な業績は認めつつも、植民地主義の背後にある論理を批判し、同時に自身の属する文化や伝統の優秀さをすぐれて意識的に唱えるうちに、その必然的な結果として、Finnegan のような真摯な研究者すら、部外者としてはじき出さざるを得なくなってしまう。アカデミックに優雅にふるまうことなど、夢のまた夢も同然であるような現実を、常時目前にしなければならぬとするならば、そうなるむしろ当然だろう。ようするに、Kunene のする主張というのは、極端なイデオロギーの次元に属するものだという事だ。生きるか死ぬかの闘争の世界にあっては、学問的な真理に対する考慮など無視されて当然である。といて、Finnegan の言うように、パフォーマンスを oral literature 成立のための必要条件と見做すことが少しもできないというわけではない。それどころか、oral literature におけるパフォーマンスの重要性については、十分に承知している (Kunene, 1976, p. 25)。とはいうものの、同じところで、その何倍もの熱意を傾けつつ、‘communal’ ということの意義を訴えていることも忘れてはならない。パフォーマンスというものが、その成立要件としてなんらかの集まりを必要とし、そのように人が集まれば、とりわけアフリカ人の場合、‘communal’ な状況へと比較的容易に近づくことになると、彼は経験から知っていたのである。それだけではない。同じ発言をするにしても、イデオロギーの次元においては、その発言がいったい誰の手によってなされたか、ことさら酷しく追求されることにもなる。その際、当事者の発言のみが、偏って優遇されるのはもちろんである。といて、これは差別でもなんでもない。イデオロギーというものの特性上、きっとそうなるというだけの話である。とするならば、当然に、部外者である Finnegan では役不足ということにもなるだろう。

が、ここで重要なのは、Kunene にとって、oral literature というものが、なにより闘争に貢献する、有力なイデオロギー上の旗印のひとつになり得るものだったという事実のほうである。考えてみれば、そのようなものとして機能するのに必要ないくつかの条件が、ごく自然な形で oral literature には備わっている。たとえば、それは上でみたように、Finnegan のような真面目な研究者ですら、仲間の領域から無理なく排除される点ひとつ取っても、納得できるはずである。Black Consciousness の運動が、親密な眼差しを向けてくれる白人リベラル派の力に頼るのをやめようとしたのにそれはとてもよく似ているが、実際、そうした排除と決別の実践があればこそ、Black Consciousness の運動は最終的に勝利を収めることができたのである。イデオロギーである以上、敵と味方とはあくまで峻別されなければならない。ほのぼのとした友好の絆など、修復可能なまで断ち切ってこそ意味がある。その点、oral literature には、じつは別の利点も準備されている。なぜなら、oral literature は、本来的に過去と深く結び付いているからである。外来の文学の猿真似などにはけっして望み得ないような古さを持っている。植

民地主義がアフリカにはびこるよりもずっと以前にまでその起源は遡る。その古い時代には、Kunene の言うところの 'communal' な世界がごくふつうに機能していた。とするならば、それは根本的に部外者には理解不可能なものである。埋めることのできない深い溝が両者のあいだにはすでに切られている。それは肌の色の違いにも似た越え難いひとつの溝だとも言えるだろうが、Kunene がしなければならないのは、Black Consciousness の運動がしたのと同じように、本来的に oral literature がどのようなものか、誤解されるのを恐れることなく提示してみせることであった。重要なのは、正しいか正しくないかではない。敵と味方のあいだに切られている深い溝を、もっとも明瞭な形で現象させることこそ重要なのである。それでこそ、oral literature というものに内在する諸々の特徴も生きてくる。たとえば、それは、本来的に「翻訳」されるべきものである。たとえば、それは、「収集」されなければならない。植民地主義による支配において通常想定されている、教える側と教えられる側という関係が、oral literature においては完全に逆転するのである。そのように目にみえる次元で通常の立場を転倒させてみせること、それこそ闘争の、イデオロギーのめざすところではなかったのか。

とはいうものの、そのように十分すぎるほど堅牢にみえる Kunene の戦略にも、ある致命的な陥穽が存在している。その陥穽とは、ほかでもない、Kunene が終始エグザイルとしてふるまわざるを得なかったという事実由来する。エグザイルである以上、その当然の結果として、闘争の現場には直接関与できないことになる。ところが、oral literature が真にその機能を発揮するには、直接その場にいることこそ必須の要件とする。同志のなかに交わり、現実の声に直して自身の詩を唄い上げなければならない。その声は喉を震わせるや否や消滅してしまうだろうが、それだからこそ、なんどでも繰り返し発せられなければならない。それでこそ、同志の結集する具体的な旗印ともなり得るのだが、にもかかわらず、エグザイルでいるかぎり、そうした現場への直接の関与は望めない。いきおい、Kunene としてはより観念的にならざるを得ないだろうし、いったんズールー語で書いたものを自ら英語に訳して出版するなど、テキスト上での操作にも凝らざるを得なくなる。が、イデオロギーというものが、その生み出され練り上げられる場所と、血を流しつつ実行に移される場所とを原則的に別にするというその本来の姿を想起すれば、そのようにして Kunene を見舞うエグザイルとしての不運も、ある程度軽減できないことはない。要は、徹底して観念的になってみせることである。観念的になればなるほど、現場との距離は歴然としたものになってゆくだろうが、そうした距離を無理に否定するのではなく、むしろ積極的に受け入れて、周りにもそうだと公言してみせること。そうすることで、いっぽうにおいて観念的であるはずのイデオロギーの矛先をひたすら磨くのである。その意味では、上記二冊の詩集に付された、著者自身による序文は絶対必要なものであったと言えるだろうし、その試みは、上でみたように観念的＝イデオロギー的に成功していると思ふこともできる。Kunene の構える観念の矛先は、植民地主義の心臓部を外すことなく突き刺しているのである。

6

さて、*Zulu Poems* に収められた Kunene の詩であるが、その序文の直後には、懇切丁寧な注釈が九項目に亘って付けられている。そうすることで自身の作品が如何に正しくズールー文学の伝統に連なるものであるか、自己解説しているのであるが、そうした一見無邪気な試みの背

後には、見逃すことのできない、ある作為が隠されている。いうまでもなく、この注釈は、表向きにはズールーの文化や伝統に詳しくない読者の便宜を図るという役割を担っているのであるが、同時にそうした注釈が読者にとって便利であればあるほど、あるいは、ズールーの文化や伝統に関して読者が疎ければうといほど、注釈に続く読者の読みを規定、あるいは、コントロールすることになってしまうからである。これが通常の場合ならば、読者による作品の読みを、なにより円滑に進めるための実際的便宜としておけば済む話なのかも知れないが、本稿のような議論の場合、おざなりにできない問題含みの行為となってしまう。というのも、Kuneneがこの作品でやろうとしているのは、上でみたように、どんな無邪気や客観とも無縁な一連の戦略に基づいたものだったからである。実際的な便宜を図るなどというのは、ここではただの口実にしかなり得ない。読者の読みを野放しにしない、むしろそれを積極的に操作する、この注釈の目標がそこにあるのは明白だからである。従って、読者の取るべき態度としては、そうした注釈の恩恵だけは十二分に浴しつつ、読みの次元では、その操作を受け付けないようバランスよく踏みとどまるのが理想である。もちろん、現実がそのように理想どおり運ばないのはいつものことながら、それでも、そのようにふるまってみるだけの価値はあるだろう。が、本稿の場合、それだけで話は終わらない。というのも、なによりイデオロギーとしての oral literature について考えるという目標に沿って言うならば、事情はもう少し複雑になるからである。すなわち、そうした側面からの成果をほんとうに挙げたいと望むならば、著者の思惑に故意に同調してみせてこそ、逆に作業はうまく進むと考えられるからである。従って、多数の短い詩から成る目前の作品群のうち、具体的にどの詩を選んで論じるか、その選択は、まず第一にこの注釈の内容次第だということにもなるだろう。

そういったわけで、九つある注釈のうち、まずは四番めのものをみてみよう。これは、いわゆるエレジーについて言及したものであるが、Kunene がことさらこのサブ・ジャンルを注釈に採り上げたのには理由がありそうだ。ひとつには、一番めの注で述べているように、「元来、ズールー文学にはエレジーが存在しない」からである。ようするに、自作のなかにエレジーが含まれているのは、ズールー文学の伝統に則ったものではなく、外来の影響を受け入れた結果であると自ら告白しているのであるが、これはいったいどうしたわけだろうか。というのも、上でみたように、外来の影響こそは Kunene にとって排除すべき最たるものであるはずだからである。そこまでしてエレジーを自作のひとつに加えなければならなかった理由とはなんなのだろうか。どう言い訳したところで、この矛盾を糊塗することはできそうにないように思えるが、ひとつだけそれを代弁すれば、こうなるだろう。闘争に死は付き物であり、しかも、その死はつねに嘆かれるべきものであるということ。そして、そうした自己犠牲による死は、闘争の新たな活力源となり得るものであること。問題の注釈には、次のように書かれている。

こうした控えめな表現は、題材の処理が如何に「取るに足らない」ものであっても、損失それ自体は強烈でリアルなものだということを、突然解からせることによって、独自の恐怖を産み出すことになる。そのようにして、読み手あるいは聴き手は、損失のもたらす感情を自身に引き付け経験するよう仕向けられる。詩はただ単に現実生活を思い起こさせるだけなのである。(Kunene, 1970, p. 25)

これについては、多分に Kunene のエグザイルとしての立場が関係していることを忘れては

ならないだろう。自身と故国とを繋ぐものを、自己犠牲による死という形の上にノスタルジックに投影するというのは、十分あり得る話だからである。

詩集のなかには、エレジーが四つ含まれている。すなわち、‘Elegy for my Friend E. Galo’、‘Elegy for Msizi’、‘On the Death of Young Guerillas’、‘An Elegy to the Unknown Man nicknamed Donda the Son of Gabela, who died in the War’の四つであるが、エレジーがイデオロギーに貢献し得るかどうかは、そこで悼まれる死の具体性如何に懸かっている。その死の属する事件あるいは人物の固有名を読者が具体的に名指しできるかどうか、それ次第だと言えるだろう。上の四つの作品のうち三つには、そのとおりそれぞれ人物名が入っている。が、問題は、それをみて読者が「あれ」とか「これ」といった形で具体的に指し示すことができるかどうかという点にある。でないと、悲しみや嘆きを怒りや憎悪に変え、力としてそれを一点に集約することができなくなってしまう。悲しみや嘆きが無闇に拡散してしまうようでは役に立たない。では、ここに出てくる三つの固有名、‘E. Galo’、‘Msizi’、‘Donda the Son of Galo’とはいったい誰なのか。その問いに即座に応じられる者が多ければ多いほど、これらの詩は、イデオロギーの装置として有効に機能し得ることになるだろう。

固有名については、注釈の二番めにも採り上げられている。それによれば、ズールー詩においては、固有名は単なる固有名ではなく、同時にさまざまな概念を表す。たとえば、‘A Poem’という詩に出てくる泉の名前 ‘Mpindelela’ には、‘recurrent’ という意味がある。結果として、詩は、その表面的な意味である「ムピンデレラの泉で誰かと水を飲み憩いたいという願望」を越えて、「回帰する思慕」や「泉の動きそのもの」をも表すことになるというのだが、実際、詩集のなかには、そうした固有名が多数出てくる。Kunene 自身はこうした「意味の二次元的な使用」の例として、‘Thoughts on a Gathering Storm’、‘Your Footprints’、‘Invocation to Life’、‘Valley of Rest’ の四つを挙げている。いうまでもなく、意味の多義性は詩の生命であるし、諷刺を目的にそれを使えば、容易に政治的機能をも発揮する。例として、Kunene の挙げている詩のうち、‘Your Footprints’ をみてみよう。

Your footprints were fearful.
They trampled over the dreaming earth.
But when you arouse
You dragged broken legs,
Wailing like a cripple.
I stood aside watching you,
And saw you trembling.
Then I knew the mask of your cowardice had been removed.
You ran into the knot of the night
Blind in the direction of death
Until I found you and closed your eyelashes. (Ibid., pp. 81-82)

そんな短い詩であるが、注によれば、この詩が指しているのは、「個人でもよいし抑圧する政体でもよい」という。問題なのは、もちろん、個人を指す場合である。その個人が「抑圧する政体」に属するか否か。もちろん、属しないと考えたほうが多義性は増す。抑圧する側とさ

れる側が、同一の詩のうえで表裏一体を成すというのは、政治的にこのうえない効果を発揮するからである。また、呼びかけられる 'you' は、匿名であるぶん、逆説的に上で触れた固有名の二重性に匹敵する機能を持つ。そうした多義性に支えられ、ただの十一行しかないという短さが、全体としてコンパクトな硬さを獲得することにもなる。これもまた得難い詩のメリットであると言えるだろう。

ところで、この 'Your Footprints' という詩は、いわゆる「レジスタンス・ポエム」に触れた六番めの注においても言及されている。イデオロギーという側面から考えれば、この種類の詩のほうが、もちろん、より闘争的にふるまい得る。悪しざまに敵を罵り、自身の文化的価値や伝統を直接讃えることができるからである。「たとえば自由といったような抽象的価値を唱道する」のではなく、「'communal' な価値を具体的に主張する」。アフリカにおけるこの種の詩はそんなふうだと、Kunene は言う。'Your Footprints' の場合、上で述べたように、さらに多義性という強みがあるから、そのぶんレジスタンスの詩としてはより機能的だと言えるだろう。実際、イデオロギー上の旗印ともなり得る可能性をこの詩は十分に持っているのである。

注には、他に例として、'Europe'、'Political Prisoner'、'Avenge'（作中のタイトルは、どうしたわけか 'Vengeance' となっている）といった作品の名前が挙がっている。いずれも、典型的という意味で、非常に解かりやすい詩に出来上がっているが、それだけでなく、それぞれにある種的美を湛えている。好むと好まざるとにかかわらず、露骨にならざるを得ないこの種の詩としては、秀逸と言ってよいだろう。たとえば、'Vengeance' という比較的有名な詩はこうである。

How would it be if I came in the night
 And planted the spear in your side
 Avenging the dead:
 Those you have not known,
 Those whose scars are hidden,
 Those about whom there is no memorial,
 Those you only remembered in your celebration?
 We did not forget them.
 Day after day we kindled the fire,
 Spreading the flame of our anger
 Round your cities,
 Round your children,
 Who will remain the ash-monuments
 Witnessing the explosions of our revenge. (Ibid., p. 67)

7

The Ancestors & the Sacred Mountain の序文の内容が、十二年前の *Zulu Poems* のそれにも増して過激なことは、すでに上でみたとおりである。同時に、詩集に収められている個々の詩も、それに見合う形で表現のより露骨なものが多くみかけられる。もちろん、それは、南アフリカ

国内の抵抗運動の動きを反映したものに相違ないのだが、作品が政治に接近すればするほど、反対に芸術としてはその厚みを減じるというのが、いわば一般的なセオリーである。積もりに積もった鬱憤を一時に爆発させるには便利に違いないが、長い目でみれば、芸術作品としての厚みを優先させながら窮屈にそうしたほうが、結局はより効力のある政治的装置となり得ることも解かっている。いうまでもなく、芸術の径としては、後者のほうがより困難であるから、Kunene がその点どのように対処しているか調べることは、彼の詩人としての力量を問うことにもなるだろう。

ところで、この詩集に収められた作品には、あきらかにみてとれる特徴が幾つかある。ひとつには、用いられる詩語に偏りがあるということ。そのなかでも、oral literature との関係で言うならば、たとえば、‘voice’、‘song’、‘singer’、‘anthem’、‘poem’、‘poet’、‘tale’、‘story’、‘epic’、‘feast’、‘festival’、‘ecstasy’、‘arena’ といった言葉が作品のなかに頻出する。もちろん、これらは名詞だけに限られているから、品詞を変えれば、あるいは、関係語も含めれば、同様の範疇に属する詩語はもっと増えることになるだろう。もうひとつの目立った特徴は、タイトルに多数の人間が扱われているということである。しかも、その多くは固有名を持っている。Zulu Poems に比べれば、実際、人間中心といってもよいような様相をこの詩集は呈しているのだが、まずは、こうした特徴を手掛かりに議論を進めてゆくことにしよう。

よりアプローチし易いのは、二番めの特徴のほうである。固有名とイデオロギー上の効力との関係については、先にも少しだけ言及しておいた。闘争の局面で捉えた場合、詩のなかで触れられる人物や事件は、より具体的であるほうが望ましいというのがそれだったが、上で指摘しておいたように、とかく露骨に政治的な方向に傾こうとするこの詩集において、そうした固有名が目立つというのも当然の結果には違いない。

そうした要因が緊密に絡まり合っている様子を、実際の作品でみてみよう。たとえば、‘Nozizwe’ というタイトルの詩は、こういう作品である。

You were to be the centre of our dream
To give life to all that is abandoned.
You were to heal the wound
To restore the bones that were broken.
But you betrayed us!
You chose a lover from the enemy
You paraded him before us like a sin.
You dared embrace the killer of your father
You led your clans to the gallows.
You mocked the gods of our Forefathers.
You shouted our secrets before the little strangers
You mocked the sacred heads of our elders
You cast down their grey hair before the children
Their lips that hold the ancient truths were sealed.
By their sunken eyes your body was cursed
The moving river shall swallow it! (Ibid., p. 2)

この詩のタイトルが人物の名前を指すことは、それに付された ‘a traitor who served the SA police’ という説明からも明らかであるが、それにしても、露骨な罵倒の連続である。とりわけ、六行め以下の、指さすように単純に ‘You’ ではじまる弾劾の羅列は、闘争の目的に適うほどには具体的であるが、詩としては表面的すぎないだろうか。難解であればよいというわけではないけれども、詩という形式を選択している以上、内容の面からも然るべくそれに配慮されるべきではないか。それでこそ、内容形式とも相互的に上昇してゆくこともできるのではないか。

けれども、もしこれがこれみよがしのプロパガンダだとしたら、少しばかり話は違うのかも知れない。というのも、プロパガンダというものは、形式上の美しさへの配慮はしないのが、むしろふつうだからである。というか、通常の芸術形式と比較すると、きわめて歪んだ配慮をする。プロパガンダにおいては、形式それ自体は少しも自律しておらず、内容そのものに貢献してこそ意味を持つ。それが証拠に、プロパガンダにおける芸術諸ジャンルの垣根は低く、容易にジャンル間の内容的な交換が可能となる。たとえば、小説の内容は映画のそれに、映画の内容は小説のそれに簡単に移すことができる。それでいて、小説も映画も、全体的な出来としては損なわれずに済むのであるが、詩の場合にも同様のことが起こり得る。プロパガンダの場合、詩のインスピレーションを小説にも映画にも比較的容易に変換できるからである。それでいて、後者が前者に従属するといった、通常の原作の論理はここでは機能しない。それぞれがそれぞれに自律し得る。というのも、そうした相互関係を持つ詩も小説も映画も、形式としては、ある共通の内容にこそ従属するからである。そこでは、文字どおりの意味で、内容がすべてなのである。

プロパガンダにおける形式と内容との関係とは、もっと言えば、芸術における内容至上主義とはそうしたものである。とするならば、ふつうに詩の表面性を指摘したところで批判にはならない。形式と内容とが相互に持つべき関係を然るべきものとして想定してもはじまらない。プロパガンダにおいては、詩と雖も、ジャンルとして閉じられてはいないからである。イデオロギー上のどの装置とも自由に連結可能なように、それは常時回路として開かれていなければならない。その度合いこそ、むしろ評価の基準となるのである。

Kunene のこの詩を、そのようなものとして捉えたとしたら、なにゆえこの詩集が詩語に際立った偏りを持つかについても、比較的容易に理解できる。なにゆえ oral literature というものをことさら想起させるような詩語がそこに頻出するか、その謎を解くこともできるだろう。というのも、Kunene にとっての oral literature とは、なによりイデオロギー上の装置のひとつとして、闘争本体に直結すべきものだったからである。エグザイルとして、oral literature の実際化する場所からはどうしようもなく離れている以上、あくまでもそれは、実践するためのものではなく、それ自体唱道すべきものだった。結果として、個々の作品がどれだけいびつに歪もうが関係はない。そうした歪みのなかから、新たな唄が唄われ、新たな声が上げられさえすれば報われる。かくて生まれた唄や声が、闘争の成果へとまっすぐに通じていさえすれば、それでよいのである。

そのようにして、新たな唄や声の生まれる瞬間を祈念したような詩がこの詩集のなかには幾つも収められているが、例としてそのうちのひとつをみておこう。

After the festival, after the feast

After the singing
After voices have faded into the night
And the sounds of talking have ceased
And the angry winds have shed their manes
And people have stopped to dance
Your voice and your voice only
Shall rise from the ruins.
Your dreams shall invade our earth
Creating an endless line of horizons
We too shall follow the song of the nightbird to the hill
The whole earth shall see the falling star
The time that bears the glorious seasons
Shall stampede to the valley of first-fruit shall come from all nations
The mountain springs shall burst open their freshness.
People shall thrust forward a movement
Like ecstatic minds at play
The future song shall be born
For the song is the sun of the earth
The earth is the mystery of the universe. (Ibid., pp. 26-27)

‘Tribute to Mshongweni’ というのが詩のタイトルである。副題に、‘A Great Nineteenth Century African Poet’ とあるように、前世紀の詩人に讃辞を捧げるという形を取ってはいるものの、現象として讃えられているのは、この先起こるべき唄の（声の）誕生を祝ってのものである。そして、このようにして生まれるであろう詩（声）を、Kunene にならって、‘communal’ と形容したとしても差し支えないだろう。とするなら、プロパガンダとしての詩とは、その根本において、伝統により支えられていることになる。その詩は表面的でもなければ薄っぺらでもない。それどころか、そのように通常の評価を裏切ること自体が、イデオロギー上の主張ともなっている。上で問題として挙げておいた、芸術＝政治的装置としての困難な径も、かくて乗り越えられたことになるだろう。同時に、それは、Kunene がなによりエグザイルであればこそ成し遂げられた快挙だったに違いない。

8

考えてみれば、パフォーマンスに期待するというのは、なにも Finnegan のような研究者に限ったことではなさそうだ。oral literature に対してアカデミックにアプローチするという方向から離れることにより議論をはじめた本稿の辿り着いた先もまた、一種のパフォーマンスに対する期待という地平にはかならないからである。ひとつには、Kunene がエグザイルとして遠く故国から離れていたという事実。自身の唱えるイデオロギーの実践されるべき場に居合わせることができなかったことにより、彼の作品は文字で書かれた文学にならざるを得なかったが、闘争という絶対の目標に身を捧げる以上、自身の詩はそうした現場に連結してこそ意味があっ

た。その現場において自身の詩が新たな詩（声）を生み出しさえすれば、あるいは、闘争的で‘communal’なパフォーマーの出現を促しさえすれば、Kuneneの文学的なふるまいはその存在意義を持ち得たのである。とするならば、本稿の最初の引用でみたFinneganの主張とKuneneのめざすところとは、意外と接近していると言ってよいのかも知れない。ひとつには、oral literature というものが、パフォーマンスを通じてのみ、「文学的産物として結実」し得るということ。ひとつには、「伝達と存在それ自体」との関係において、oral literature というものが、特徴的な親密さを持つということ。すなわち、oral literature においては、「パフォーマンスの繰り返しを通してはじめて連続した存在を獲得し得る」ということ。そうしたFinneganの主張の骨格は、そっくりKuneneの立場にもあてはまることになる。といて、もちろん、それは言葉の上だけの話である。というのも、ふたりのあいだには、つねに部外者と当事者の違いが消し難く存在しているからである。そのことを我々はけっして忘れてはならないだろう。

最後にひとつだけ、Kuneneのために言うておかなければならないことがある。というのも、本稿においては、終始oral literature=イデオロギー的装置という観点から、彼の二冊の詩集に収められた作品にアプローチしてきたが、そうした制約を外すならば、本稿においては触れなかった作品群のなかから、注目すべき優れた詩を幾つも拾い上げることができるからである。ようするに、エグザイルという立場や闘争という大義、それらを必然的なものとする全体から離れて、彼の作品を鑑賞するならば、それに耐え得るものが多数存在するということである。とはいうものの、そうした鑑賞を済ましただけでは批評の意味はないだろう。そのようにしてコンテクストから独立した形で鑑賞に耐え得る作品というのもまた、Kuneneがエグザイルであればこそ、闘争の大義に献身すればこそ、現実化した作品に違いないからである。厳しすぎる現実と美を求める芸術という両極端において成立したそれら二種の作品群、それらを比べてみる必要があるだろう。その際、それらのあいだには、きっと合わせ鏡に映したようにひとつの像が立ち上がってみえてくるはずである。いずれ機会があれば、そうした興味深い像の成り立ちについても明らかにしたいと思っている。

REFERENCES

- Finnegan, Ruth. 1970. *Oral Literature in Africa*. Clarendon Press, Oxford.
- Kunene, Mazisi. 1970. *Zulu Poems*. Andre Deutsch, London.
1976. South African oral traditions, in Christopher Heywood (ed), *Aspects of South African Literature*. Heinemann, London.
1982. *The Ancestors & the Sacred Mountain*. Heinemann, London.